

知床周辺海域の鯨類

宇仁義和

093-0006 網走市南6条東5丁目6番地, 宇仁自然歴史研究所 (現所属:099-2493 網走市八坂196, 東京農業大学生物産業学部)

Whales, Dorphines and Porpoises off Shiretoko

UNI Yoshikazu

Uni's office of Nature-human Interaction Studies, Minami6-Higashi5, Abashiri, Hokkaido 093-0006, Japan (present address: Tokyo University of Agriculture, 196 Yasaka, Abashiri, Hokkaido 099-2493, Japan). unisan@m5.dion.ne.jp

I examined actual distribution of whales species off Shiretoko in the modern era through a variety of materials, which included sighting, stranding, landing, and reviewing literature as well as unpublished archives. With confirmed evidence, 13 species of 5 baleen whales and 8 toothed whales were recorded, such as *Balaena glacialis*, *Balaenoptera musculus*, *B. physalus*, *B. acutorostrata*, *Megaptera novaeangliae*, *Physeter macrocephalus*, *Berardius bairdii*, *Mesoplodon stejnegeri*, *Delphinapterus leucas*, *Orcinus orca*, *Lagenorhynchus obliquidens*, *Phocoenoides dalli*, *Phocoena phocoena*. Of those, *B. glacialis*, *B. musculus*, *B. physalus* had not been seen last 40 years, and *D. leucas* had been seen recently, but it was on rare occasions, typically a vagrant to Shiretoko waters. However, in the Nomination of the Shiretoko Peninsula for Inscription on the World Heritage List, there were 21 whale species listed. This was an over estimation of the actual figures.

はじめに

オホーツク海に突き出た知床半島周辺の海はさまざまな環境がとりまく。北海道と国後島の間の海域を根室海峡というが、半島付根の野付水道は最深部で17mと極めて浅い。一方、知床岬付近は急峻な陸上の地形がそのまま水深2000mを超える千島海盆に続いている。浅海と深海の両方が近接して存在することが、ここに回遊するクジラの種類を増やしている。知床周辺海域(暫定名称)一標津から知床岬を経て北見大和堆一を範囲に分布する鯨類を記述した。

なお、小型捕鯨船からの目視情報や観察は聞き取りによるもので、写真などの物的証拠がなく、あくまで参考情報と考えたい。また、本論は宇仁(2005)に若干の加筆訂正を加えたものである。

何種類いるか

日本の4倍の面積を持つオホーツク海では、これまで19種類の鯨類が記録されてきた。列記すると、ヒゲ鯨がホッキョククジラ *Balaena*

mysticetus、セミクジラ *Balaena glacialis*、コククジラ *Eschrichtius robustus*、ザトウクジラ *Megaptera novaeangliae*、シロナガスクジラ *Balaenoptera musculus*、ナガスクジラ *B. physalus*、イワシクジラ *B. borealis*、ミンククジラ *B. acutorostrata* の8種類、歯鯨がマッコウクジラ *Physeter macrocephalus*、ツチクジラ *Berardius bairdii*、キタトックリクジラ *Hyperoodon ampullatus*、アカボウクジラ *Ziphius cavirostris*、オウギハクジラ *Mesoplodon stejnegeri*、シロイルカ *Delphinapterus leucas*、シャチ *Orcinus orca*、コビレゴンドウ *Globicephala macrorhynchus*、カマイルカ *Lagenorhynchus obliquidens*、イシイルカ *Phocoenoides dalli*、ネズミイルカ *Phocoena phocoena* の11種類である。このうちホッキョククジラは北海道周辺海域での観察はない。

近年の観察や漂着は、斜里側(オホーツク側)ではミンククジラ、ツチクジラ、シャチ、オウギハクジラ、シロイルカ、カマイルカ、イシイルカ、ネズミイルカの8種類、これに加え、種不明の大型鯨類の身体の一部が漂着している(北海道新聞

2002年10月31日オホーツク面)。なお、シロイルカはウトロ付近で羅網して死亡した1例のみが知られているが刊行された報告はない。根室海峡での確実な観察記録は、斜里側の記録に加えザトウクジラ、マッコウクジラがあり、あわせると知床半島沿岸では10種となり、これが現在の分布状況と考えられる。

日本捕鯨協会がまとめた1941年以降の捕獲統計(日本捕鯨協会1954)では、網走を基地とする大型捕鯨の主要な捕獲対象はナガスクジラで、ほかにマッコウクジラとザトウクジラが記録されている。セミクジラも戦前に北見大和堆付近などで捕獲されている(松浦1936)。シロナガスクジラについては公式記録には記載がないが、後述のとおり網走に陸揚げされたことがある。イワシクジラは紋別で陸揚げされているが、網走ではない。またコククジラは1960年代に1度、オホーツク海で小型捕鯨船によって目視されたというが、場所は不明である。

一方、キタトックリクジラとアカボウクジラの分布は疑問である。キタトックリクジラは旧ソ連時代に報告があり(スレプツォーフ1957)、西脇(1965)もオホーツク海で「4-6月に見られるものは、おそらくキタトックリクジラであろう」としているが、現在に至るまで同種の捕獲・観察・

漂着はない。しかしながら、ヒレナガゴンドウは礼文島のオホーツク文化期の遺跡から出土したがその後の生息記録がなく(Kasuya 1975)、明治中期に北海道日本海側の天塩(現: 苫前郡羽幌町)を基地とした網取り式捕鯨では1890年に「巨頭」(ゴンドウ)9頭の捕獲記録があるので(宇仁2001a)、あるいはキタトックリクジラも1950年代あたりまでは分布していたのかも知れない。アカボウクジラは知床博物館によって報告されていたが(中川1988)、後日写真鑑定によってオウギハクジラ属の幼獣と確認され(日鯨研ストランディングレコードO-1676)、それ以外の記録は知られていない。

よって、近代以降に知床周辺海域に回遊していた確実な証拠のある鯨類は13種(セミクジラ、シロナガスクジラ、ナガスクジラ、ミンククジラ、ザトウクジラ、マッコウクジラ、シロイルカ、ツチクジラ、オウギハクジラ、シャチ、カマイルカ、イシイルカ、ネズミイルカ)、現在の通常状態では9種(ミンククジラ、ザトウクジラ、マッコウクジラ、ツチクジラ、シャチ、オウギハクジラ、カマイルカ、イシイルカ、ネズミイルカ)と考えられる(表1)。

ところで、日本政府が2004年1月に提出した知床の世界遺産推薦書(Government of Japan 2004: 以

表1. 近代の知床周辺海域で確実な証拠をもとに記録された鯨類。Table 1. Whales off Shiretoko with confirmed recorded in the modern era.

区分 Category	和名 Japanese name	英名 English name	学名 Scientific name
現在、確実な観察や座礁漂着がある種 With confirmed sighting or stranding in recent days			
	ミンククジラ	Mike whale	<i>Balaenoptera acutorostrata</i>
	ザトウクジラ	Humpback whale	<i>Megaptera novaeangliae</i>
	マッコウクジラ	Sperm whale	<i>Physeter macrocephalus</i>
	シロイルカ*	White whale	<i>Delphinapterus leucas</i>
	ツチクジラ	Barid's beaked whale	<i>Berardius bairdii</i>
	オウギハクジラ	Stejneger's beaked whale	<i>Mesoplodon stejnegeri</i>
	シャチ	Killer whale	<i>Orcinus orca</i>
	カマイルカ	Pacific white-sided dilphin	<i>Lagenorhynchus obliquidens</i>
	イシイルカ	Dall's porpoise	<i>Phocoenoides dalli</i>
	ネズミイルカ	Habour porpoise	<i>Phocoena phocoena</i>
過去に記録された種 With confirmed photo or landing in the historical literatures			
	セミクジラ	Right whale	<i>Balaena glacialis</i>
	シロナガスクジラ	Blue whale	<i>Balaenoptera musculus</i>
	ナガスクジラ	Fin whale	<i>Balaenoptera physalus</i>

*過去の記録は標津2回(1958年と2004年)とウトロ1回(2001年)。Two recored off Shibetsu (1958 and 2004) and off Utoro (2001).

下『推薦書』を見ると、知床海域に分布する海生哺乳類は28種となっている。『推薦書』はラッコを含めておらず、鯨類以外の海獣は鰭脚類7種(アシカ科が³オットセイ *Callorhinus ursinus* とトド *Eumetopias jubatus* の2種、アザラシ科がゴマフアザラシ *Phoca largha*、ゼニガタアザラシ *P. vitulina*、ワモンアザラシ *P. hispida*、クラカケアザラシ *P. fasciata*、アゴヒゲアザラシ *Erignathus barbatus* の5種)としており、鯨類はコククジラ、ミンククジラ、ザトウクジラ、イワシクジラ、アカボウクジラ、ツチクジラ、オウギハクジラ、ハップスオウギハクジラ *Mesoplodon carlhubbsi*、イチョウハクジラ *Mesoplodon ginkgodens*、カマイルカ、シャチ、スジイルカ *Stenella coeruleoalba*、セミイルカ *Lissodelphis borealis*、ハンドウイルカ *Tursiops truncatus*、マイルカ *Delphinus delphis*、オキゴンドウ *Pseudorca crassidens*、ヒレナガゴンドウ *Globicephala melas*、コビレゴンドウ、ネズミイルカ、イシイルカ、マッコウクジラの21種をリストに記載している。

『推薦書』が引用した文献では、河村(1981)は、大隅(1972)を引いて、アカボウクジラ、ツチクジラ、マイルカ、カマイルカ、セミイルカ、バンドウイルカ、ネズミイルカ、イシイルカ、コビレゴンドウ、オキゴンドウ、サカマタ(シャチの別称)の11種とし、大泰司(1988)は、河村(1981)、大隅(1981)、西脇(1965)などからマッコウクジ

ラ、アカボウクジラ、ツチクジラ、キタトックリクジラ、イチョウハクジラ、ハップスオウギハクジラ、オウギハクジラ、ネズミイルカ、イシイルカ、マイルカ、スジイルカ、カマイルカ、セミイルカ、バンドウイルカ、マゴンドウ、シオゴンドウ(コビレゴンドウの別称)、オキゴンドウ、シャチ、セミクジラ、コククジラ、ザトウクジラ、シロナガスクジラ、ナガスクジラ、イワシクジラ、ニタリクジラ *Balaenoptera edeni*、ミンククジラの26種類を挙げている(種名と記載順序は出典通り、『推薦書』は学名のみ)。

『推薦書』附属資料の鯨類リストは引用文献を参考にしつつ新たに検討して作成したものと考えられるが、沿岸での観察記録からすればかなり過大なリストであり、逆に数例記録があるシロイルカが抜けている。『推薦書』掲載の鯨類のうち、コククジラとイワシクジラは過去にオホーツク海での陸揚げや目視があるもの知床周辺海域の記録はなく、コビレゴンドウは後述のように根室海峡での目視情報はあるが確実でなく、アカボウクジラは誤認、ハップスオウギハクジラ、イチョウハクジラ、ヒレナガゴンドウ、オキゴンドウ、ハンドウイルカ、スジイルカ、マイルカ、セミイルカに至っては過去の記録はまったく見られない。したがって、『推薦書』の掲載鯨類は記録に基づかない推測だけの種が³含まれた、過大な見積もりである(表2)。

表2. 世界遺産推薦書に掲載種のうち知床周辺海域では確実な記録がない種。 Table 2. Whales listed in the nomination of Shiretoko without confirmed evidence off Shiretoko.

区分 Category	和名 Japanese name	英名 English name	学名 Scientific name
オホーツク海での捕獲や目視がある種 With sighting or landing another area of the Sea of Okhotsk			
	コククジラ	Gray whale	<i>Eschrichtius robustus</i>
	イワシクジラ	Sei whale	<i>Balaenoptera borealis</i>
不確実な目視記録のある種 With unconfirmed sighting			
	コビレゴンドウ	Short-finned pilot whale	<i>Globicephala macrorhynchus</i>
誤認またはまったく記録がない種 Without any sighting, landing or stranding			
	アカボウクジラ	Cuvier's beaked whale	<i>Ziphius cavirostris</i>
	ハップスオウギハクジラ	Hubbs' beaked whale	<i>Mesoplodon carlhubbsi</i>
	イチョウハクジラ	Ginkgo-toothed beaked whale	<i>Mesoplodon ginkgodens</i>
	ヒレナガゴンドウ	Long-finned pilot whale	<i>Globicephala melas</i>
	オキゴンドウ	False killer whale	<i>Pseudorca crassidens</i>
	ハンドウイルカ	Bottlenose dolphin	<i>Tursiops truncatus</i>
	スジイルカ	Striped dolphin	<i>Stenella coeruleoalba</i>
	マイルカ	Common dolphin	<i>Delphinus delphis</i>
	セミイルカ	Northern right whale dolphin	<i>Lissodelphis borealis</i>

研究史

研究の意味を広くとり、方法とはわず未知の事象の解明とすれば、知床周辺海域の鯨研究は大正4年(1915)の網走での捕鯨開始にさかのぼる。道庁の捕獲統計では翌5年にナガス127頭ザトウ4頭となっており知床周辺海域にナガスクジラが豊富だったことが伺える(宇仁 2001a)。この事業場については網走市立図書館蔵の『網走の捕鯨記録自大正四年至大正八年 野坂勇吉の大正網走懐旧記から抜書』(以下『抜書』)に詳しく、1日に7頭が捕れたという記載もある。公式統計にシャチはないが、大正5年撮影の鯨体処理場の写真には、シャチ2頭(オス1・メス1)が写っている(北海道庁網走支庁 1917)。イルカについても捕獲目的の調査が最初の組織的調査であった(平島・大野 1944)。ただし戦時中の検閲で捕獲の位置や数は伏せ字である。

戦後は大村秀雄博士らがミンククジラの研究に網走を訪れ、小型捕鯨業者から標本を得ている(Omura & Sakiura 1956)。近年も小型捕鯨の捕獲個体の胃内容分析からイシイルカの食性(Walker 1996)とツチクジラの食性(Walker et al. 2002)が発表されている。

捕獲個体を材料としない研究では、北海道が主催した「知床半島総合調査」で航空調査が行われた。河村(1981)は1979年8月10日に「道北オホーツク沿岸から沖合60哩に至る水域」の航空調査を行ない、カマイルカ、ゴンドウ(未確認、暫定記載)、イシイルカの3種を発見した。

直接観察では、佐藤晴子が標津を基地に、根室海峡で高密度な観察を1995年から継続している。4-10月は海が出航可能な状態ならばほぼ毎日観察に船を走らせていおり、根室海峡が国内有数の鯨類が豊かな海域であることが明らかにしてきた(佐藤 1996, 1998 & 2004)。研究の一端は笠松(2000)でも紹介されている。

漂着個体からは1990年代後半にオウギハクジラが得られるようになった。稚内と根室での記録に加え、羅臼と斜里でも回収され、上述のとおり混獲も確認されオウギハクジラがオホーツク海に分布することが確実となった。斜里地域の漂着記録は1996-2000年の短期間のまとめがあり、少数の事例ながらイルカ類は7月に、ミンククジラは10-11月の漂着が多かった(宇仁 2001b)。

2005年の2-3月、朝日新聞社と知床財団との共

催による冬季の動物調査が実施された。2月27日に行なわれた鯨類の航空調査では、根室海峡でツチクジラ1頭とネズミイルカ約10頭、オホーツク側でミンククジラ1頭とネズミイルカ3頭を観察した(谷口 2005; 笹森・小林 2006)。

各種解説

1) セミクジラ

知床周辺海域の記録は、1925-34年に8月の北見大和堆付近で4例、9月に知床岬北方沖で3例の捕獲がある(松浦 1936)。戦後の記録は、学術捕獲が1968年7月にサハリン北知床岬東南東沖で2頭が捕獲され紋別に陸揚げされた(Omura et al. 1969)ほか、網走の小型捕鯨が1961年にウトロ沖で目視している(三好浩治私信)。北海道のオホーツク沿岸では近年の観察はない。過去にはオホーツク文化期の利尻島亦稚貝塚出土トナカイ角製クジラ像に精巧なセミクジラの浮かし彫りが施されている。

2) コククジラ

オホーツク海での目視は、1960年代に正確な場所は不明だが小型捕鯨船、国後島北岸でのソ連調査船の計2例あるが、1995年から濃密な観察が継続中の根室海峡ではいまのところ観察事例はない。アジア系群の一部個体は本州の太平洋沿岸を通りサハリン北東沿岸の索餌海域に達すると推定されているが、これまでにオホーツク海での捕獲記録がない。これは、この回遊経路を利用する個体が極めて少なく、しかも太平洋からオホーツク海へは国後島と択捉島間の国後水道以北を通過するためと考えられる(宇仁 2004b)。

3) シロナガスクジラ

以前にも紹介したとおり(宇仁 1998, 2000 & 2001a)、1932年に網走の鯨体処理場に陸揚げされた写真が存在する。これには2種類あり、ひとつは「昭和七年夏」の文字が見える解剖場での写真(図1)、そして同一個体の解剖風景と見られる絵はがき(図2・3)である。写真から、(1)大型である、(2)小型の背ビレ、(3)黒一色のヒゲ板、(4)右側面に白色部分が見られない、などの特徴からシロナガスクジラと考えられる。写真には撮影場所は記載されておらず、絵はがきのキャプションは「東洋捕鯨」と旧い社名を使っており撮影

図1. 網走に陸揚げされたシロナガスクジラ。「昭和七年夏 東洋の事業場」の文字が見える。野坂勇吉旧蔵。網走市市史編纂室蔵。



図2. キャプションには「東洋捕鯨」とあるが、設備や写真の品質などから大正時代に市街地北方のタンネシラリで操業していた東洋捕鯨ではなく、網走港に事業所があった日本水産の解剖場と考えられる。撮影年月日はないが、切り取られた背ビレの位置、背景の見物人から図1と同一個体と判断した。網走市立図書館蔵。



図3. 鋸穴の位置から同一個体を考えられる。図2と組の絵はがき。ヒゲ板が黒一色。網走市立図書館蔵。



年代も場所も未記載だが、同一場面であり、日本水産網走鯨体処理場と判断した。ただし、捕獲位置は不明である。なお、写真の方は、網走の名士、野坂勇吉旧蔵のものである。本種はオホーツク海のような属海には分布しないとされることもあるが、まれには回遊することがあるのだろう。なお、同年6月5日の小樽新聞には「長鬚鯨」の写真付き記事があるが、こちらは夜間にナガスクジラの解剖が行われており、この個体とは別である。

4) ナガスクジラ

大正時代に始まった網走の捕鯨では主要な捕獲対象で、岸近くでの捕獲もしばしばあった。日本捕鯨協会（1954）によると、網走での捕鯨は1955年にはナガス38頭ザトウ2頭であったものが翌56年からナガスのみでの捕獲となり、1956年14頭、1957年6頭、1958年4頭、1959年3頭と激減し、この年が大型捕鯨の最後となった。紋別でも沿岸の資源減少から、1964年からはサハリン東方沖に出漁するようになったが、ここでもナガスはわずか4年間で減少が顕著となり、1967年で紋別の事業所は廃止された。その後、小型捕鯨によるオホーツク海沿岸でのナガスクジラの発見は近藤（2001）によれば、1968年6頭、1970年2頭と消滅寸前というが、網走の小型捕鯨船はオホーツク沿岸で石油試掘リグが建設されていた時期、つまり商業捕鯨モラトリアムまで北見大和堆の北端付近で夏に目視していたという。

5) イワシクジラ

網走を基地とする沿岸捕鯨で1943年7月に1頭、紋別で1965–67年の7–8月に33頭の捕獲実績があり、日本鯨類研究所が実施する北西太平洋鯨類捕獲調査（JARPN）で7月に枝幸沖での目視がある（藤瀬ら2004）。また元日東捕鯨霧多布事業場長からの聞き取りでは、1960年代に国後島と色丹島との間の三角水域は同種の好漁場だったという（佐々木俊六私信）。しかし、知床周辺海域での目視記録や捕獲情報は得られなかった。

6) ミンククジラ

最も観察頻度の高いクジラである。網走などを基地とする小型捕鯨で1987年まで捕獲対象となっており、1970–80年代の知床周辺海域での捕獲

は5月がピークで4月も多く、ついで北見大和堆付近では9月にも多い（Miyashita & Hatanaka 1996）。Omura & Sakiura（1956）は試料の多くを網走で得ている。なお、この論文にある1953–54年の捕獲位置図では知床半島沿岸の捕獲が見られないが、これは根室海峡の漁場発見が1954年で本格操業が翌55年から（三好浩治私信）のためだろう。5–6月頃の根室海峡では母子のミンククジラが多数観察される。

7) ザトウクジラ

近年の出現は根室海峡に限られ、4–7月に南部の浅海で希に観察されている（佐藤2004）。『抜書』によれば、網走では大正時代に少数が捕獲され、日本鯨類研究所図書蔵の『鯨種別捕獲日本捕鯨協会捕獲統計簿（明治44年–昭和19年）』によれば1933年と1935年に各1頭が捕獲されている。戦後は1945–55年の5–8月に計10頭が捕獲された（日本捕鯨協会1954）。小型捕鯨ではオホーツク沿岸で石油試掘リグが建設されていた時期まで北見大和堆北端付近で年に数回目視したという。根室半島では1988年8月4日に体長11.7mの個体（日鯨研 M-016）、1998年9月11日に体長6.45mの幼獣（日鯨研 M-139）が座礁している。知床博物館で常設展示されているウトロのチャシコツ岬下B遺跡出土のトナカイ角製クジラ像（河野1955）は、吻部が幅広く先端が丸く、胸びれが長いなどの形状から本種の彫刻と考えている。

8) マッコウクジラ

網走では7–9月に捕獲されていたが、1953年を最後に捕獲記録が無い。以降のウトロ側での観察は小型捕鯨船による数例だが、根室海峡では6–9月に北部の深海域で普通に観察され、陸から見えることも多い（佐藤2004）。大型の個体であり、1–数頭のゆるやかな群れであること、北緯44度という地域からオスの単独個体と考えられる。観察場所が海峡北部に限られ、その深海で索餌することから根室海峡を通過するのではなく、国後水道など千島列島を通過して知床には北から到達していると見られる。

9) ツチクジラ

現在も小型捕鯨の対象種で、オホーツク海では

以前から毎年数頭から10頭程度があった。日本小型捕鯨協会によると、商業捕鯨モラトリアム実施の1988年には網走の2業者で22頭を捕獲、翌年の捕獲は5頭で以降は1997年を除き毎年2頭(1997年は1頭)の捕獲であった。2005年は資源調査の結果捕獲枠が倍となり4頭を捕獲、捕獲時期も釧路沿岸の調査捕鯨の開始時期に間に合わせるため、2004年までの9月1日開始から8月後半開始に変更されている。深海で索餌するため根室海峡では羅臼町松法以北(三好浩治私信)、ウトロ側では硫黄山沖以先で観察されることが多いが、網走沖でも捕獲がある。

通常本種は海獣観察事業の対象とはなっていないが、知床沿岸では頻繁に目撃され、観察事業の対象となる可能性がある。将来、捕鯨(漁業)と海獣観察事業(レクリエーションあるいは教育)の間での海面利用調整が必要になると予測される。

10) オウギハクジラ

知床近海では1996年5月20日の斜里前浜のオス成獣の漂着が初報告となった(漂着は5月上旬以前)。その後1999年に同じく斜里前浜でメス成獣、羅臼では2003年10月1日にオウギハクジラ属の漂着があり(日鯨研 O-1492)、DNA分析でオウギハクジラと判定された。さらに知床博物館で「アカボウクジラ」として記録していた個体がオウギハクジラ属であることが判明した。これは1981年7月1日に知床半島基部の斜里町日の出沿岸の小型定置網に混獲後に死亡した2頭で、博物館で写真を撮影したものである(日鯨研 O-1676)。全身を撮影した写真はないが、眼球後方と下顎から尾柄までの腹部が白く(胸鰭は黒い)、若い個体と思われる。販売され標本が残されていないのが残念だが、身体は扁平でなく、丸太のようだったという。

11) シロイルカ

2001年6月頃にウトロ側で定置網による混獲があったが、死体はすぐに廃棄されている。2004年5月には、根室海峡基部の標津で1か月ほど居着いたことがある(北海道新聞 2004年5月19日)。古くは1958年10月27日に別海町尾岱沼で座礁した1個体が捕獲されているので(北海道新聞 1958年10月30日)、まれに来遊すると考えられる。

12) シャチ

捕鯨船以外の目撃例は少ない状態が続いていたが、2000年を境にオホーツク側、根室海峡ともに知床岬付近で夏季に毎年のように10頭前後の群れが観察されるようになった。そして2001年8月に知床で撮影された2個体と同一と判断される鯨が、噴火湾で2002年9月と2003年9月にそれぞれ観察されており、日本で初めて個体識別法によって離れた海域での同一個体の確認とされた(噴火湾海洋動物観察協会 2005)。また、知床沿岸でも同一個体の複数年観察があるほか、択捉島の間でも同一個体と思われる写真が毎日新聞根室支局の本間浩昭記者によって撮影されている(佐藤ら 2006)。

2005年2月7日に羅臼町相泊で11-12頭からなるシャチの群れが流水に閉じこめられ、9頭が学術調査されおそらく全個体が死亡する出来事が発生した(Uni et al. 2005a)。さらに2月27日には択捉島で6頭が流水による集団座礁で死んだ。死体からは多くの研究が進行中であり、その一端が2006年2月16-17日に国立科学博物館で開催されたワークショップ「西部北太平洋のシャチ:現状の評価と保全に向けての展望」で示されたほか、2月19日には羅臼町で一般向けに「道新フォーラム・シャチからのメッセージ」が開かれている。なお、集団座礁後以降は知床沿岸でのシャチの観察は少数に留まっている(佐藤ら 2006)。

海氷によるシャチの集団座礁はカナダ東海岸で2例が知られるが(Mitchell & Reeves 1988)、オホーツク海南部ではしばしば発生していたようで、知床岬にはアイヌが「フンペオマモイ」(鯨の寄る湾)と名付けた場所があり、毎年のように鯨が氷で死ぬといい(秋葉 1994)、近世末から近代初期の斜里アイヌは流氷で死んだシャチを利用したという聞き取りがある(更科 1955)。確実な証拠を有する記録によると、1925-2005年の80年間に北海道のオホーツク海沿岸と択捉島をあわせて7回の流氷期の座礁があり、聞き取りなどを考慮すると、その頻度は約10年に1度程度と考えられる(Uni et al. 2005b)。

国内でのシャチの研究は数少なく、目視情報以外では、鰭脚類研究者によるアザラシ捕食の報告(Wilke 1954)、捕鯨業者が水産庁に提出した記録に基づく研究(Nishiwaki & Handa 1958)などに限

られる。また小型捕鯨船が曳航中のツチクジラやミンクジラを食いちぎることがあるといい、1988年に捕獲された3頭の胃にはツチクジラらしき皮付きの肉片が入っていたという（佐々木常世私信）。

13) コピレゴンドウ

河村（1981）も北見大和堆付近で「未確認」としつつ観察記録に含めたが、分布の記載は保留していた。近年根室海峡で希に観察されるというが（佐藤 2004）、報告者の直接観察ではなく、聞き取り結果の判断であるため（佐藤晴子私信）、本稿では分布種に含めなかった。小型捕鯨船による目視は襟裳岬から釧路沖を中心とする太平洋に限られ、オホーツク海や根室海峡での情報は得られていない。

14) カマイルカ

知床では夏に観察される。ときに千頭におよぶ大規模な群れを作るといわれ、網走沖で観察された数百頭以上の大群（小林耕一私信）は同種と思われる。出現月はオホーツク側は6-11月、根室海峡も6-11月である（佐藤 2004）。知床沿岸でのストランディングは少なく、情報不足の状態にある。

15) イシイルカ

知床半島沿岸では、根室海峡とオホーツク側では硫黄山沖からルシャ沖で観察されることが多い。知床沿岸でのストランディングは5月-翌1月があり、1999年5月23に網走で体長1m余りの当歳獣1頭が漂着（日鯨研 O-674）、2002年6月22日には体長1.2mの当歳獣が2頭同時に座礁したこともある（日鯨研 O-1246）。2000年11月22日の記録は標津沿岸での混獲で、知床としては遅い時期であった（日鯨研 O-920）。この個体の胃内容には多数のイカの口器が見つかり、イカを目当てに遅くまで居残ったと考えられる。

本種は突棒漁業の対象種で、知床沿岸で開始されたのは戦時中の資源調査（平島・大野 1944）による。当時の経験をもとに大槌町の突棒漁船が昭和50年代後半に知床沿岸での操業を再開した（宇仁未発表）。近年の網走港では通常8月のお盆過ぎから10月上旬まで多い年で10数隻が停泊している。

イルカの突棒漁業はかつて自由漁業であったが、

1989年から岩手県で知事許可、その他の操業県（北海道、青森、宮城、千葉、和歌山、沖縄）では海区漁業調整委員会承認漁業となり、2001年からは全国で知事許可となっている。現在の北海道沿岸の操業は『北海道沖合海域におけるいか突棒漁業の許可等に関する取扱方針』（北海道、平成13年6月20日施行。以下『取扱方針』）によってイシイルカ以外の鯨類の捕獲が禁止され、操業海域と陸揚港にも制限がある。

最新の『取扱方針』は2005年7月11日に改訂されたもので、操業除外水域として「北海道の最大高潮時海岸線から沖合5,000メートル以内の区域」、「茅部郡砂原町砂崎灯台と室蘭市チキウ岬灯台とを結ぶ線以西の噴火湾の区域及び室蘭市チキウ岬灯台から半径10,000メートル以内の区域」、そして北方四島周辺海域が示されている。このうち「室蘭市チキウ岬灯台から半径10,000メートル以内の区域」は2001年6月20日改正によって新しく追加された内容である。『取扱方針』に明記された操業制限は「資源の保護又は漁業調整」のため必要な場合に限定されているが、チキウ岬沖ではイルカ観察船の目の前でイルカ突棒漁船の操業が目撃され、乗客に心理的な苦痛を与えたケースがあるので（北海道新聞 1996年6月4日第2社会面）、海獣観察事業との海面利用調整を含んだ改訂と思われる。

また、漁獲したイルカの陸揚港について、知事許可制当初では「増毛港、古平港、千走港、熊石港、十勝港、霧多布港、ウトロ港、散布港（道内者）／斜里港（道外者）、網走港、紋別港」の11港が指定されていたが、2005年の改訂によって斜里町ウトロ港が除外された。これも知床が世界自然遺産に登録されたことへの配慮と考えられる。

16) ネズミイルカ

北海道では4-5月に道南の渡島半島東部の南茅部町の定置網でしばしば混獲されているが（日本鯨類研究所ストランディングレコード）、知床沿岸での観察や漂着は、根室海峡では1-11月（佐藤 2004）、オホーツク側では7翌年1月である。色も行動も目立たないため人目につかないが、普通に見られ、背中を水面上に出したままぼうっと浮かんでいることもしばしば観察される。

まとめと課題

以上のように知床沿岸，なかでも根室海峡は鯨類が多種回遊し，かつワシやアザラシなどの大型動物にも多く，加えて流氷という特異な自然現象やすぐれた景観にも恵まれた場所で，北海道では唯一，鯨類観察を事業として行うことが可能な海域である（宇仁 2004a）．知床周辺海域まで含めて考えれば大型鯨類の分布も増え，北東アジア有数の鯨類の多様性に富んだ海域といえる．とりわけシャチの観察は東アジアでも随一であり，この海域での調査研究体制の充実が望まれる．

一方，課題は漁業以外とそれ以外の海面利用活動の調整にある．知床の世界遺産登録に伴い，2004年7月に知床世界自然遺産候補地科学委員会（登録後は「知床世界自然遺産科学委員会」）が設置され，海域の管理は科学委員会の委員などで構成される「海域ワーキンググループ」で議論されている．しかし議論の多くは漁業管理に費やされており，委員もほとんどが水産科学関係者である．遺産登録に際し，トドと漁業との共存が重要な課題として認識され，トドの餌となるスケトウダラの管理策が焦点となった経緯があるので，議論が漁業管理中心となるのは理解できる．

しかし，世界遺産登録海域の管理とは生態系の保全や漁業に留まらず，教育活動やレクリエーション活動など漁業以外の海面海中利用の位置付けと管理を含むものである．これらを含んだ総合的な海面利用調整の議論は魚類研究を進める面からも今後の課題として残されているといえよう．

謝辞

本稿をまとめるにあたり，次の方や機関から情報提供などの協力を得ました．記してお礼申し上げます．

佐藤晴子，佐々木常世，小林耕一，下道吉一，三好浩治，三好英志，大木篤，佐々木俊六，木村親生，増田泰，石川創，大隅清治，日本小型捕鯨協会，日本鯨類研究所，網走市立図書館，網走市市史編纂室，網走支庁経済部水産課，北海道水産林務部漁業管理課（順不同・敬称略）

引用文献

秋葉實（解説）．1994．松浦武四郎知床紀行集．102pp．斜里町立知床博物館協力会，斜里．

藤瀬良弘・田村力・坂東武治・小西健武・安永玄太．2004．イワシクジラとニタリクジラ 鯨研叢書No.11．168pp．日本鯨類研究所，東京．
噴火湾海洋動物観察協会．2005．知床噴火湾を歩き来する!?. フンペ 29: 1．

Government of Japan．2004．Nomination of the Shiretoko Peninsula for Inscription on the World Hritage List．120pp．+ ccl．<http://www.env.go.jp/nature/isan/shiretoko/index.html>

平島安雄・大野新一郎．1944．網走地方の海豚漁業．北水試月報 1: 82-90．

北海道庁網走支庁．1917．北海道庁網走支庁管内拓殖状勢一斑．236pp．北海道庁網走支庁，網走．

笠松不二男．2000．クジラの生態．230pp．恒星社厚生閣，東京．

Kasuya T．1975．Past occuurence of Globicephala melaena in the western North Pacific．The Scientific Reports of the Whales Research Institute 27: 95-108．

河村章人．1981．北海道オホーツク沿岸海域における鯨類の分布．北海道（編），知床半島自然生態系総合調査報告書（動物編）．pp. 182-188．北海道，札幌．

河野広道．1955．考古．斜里町史編纂委員会（編），斜里町史．pp. 169-230．斜里町，斜里．

近藤勲．2001．日本沿岸捕鯨の興亡．449pp．山洋社，国分寺．

松浦義雄．1936．日本近海産背美鯨に就て．植物及動物 4: 696-702．

Mitchell E. & Reeves R. R. 1988. Records of killer whales in the western North Atlantic, with emphasis on eastern Canadian waters. Rit Fiskideilar 11: 161-193.

Miyashita T. & Hatanaka H. 1996. Consideration on whaling ground for the western North Pacific minke whale. SC/48/NP6.

中川元．1988．知床の哺乳類（郷土学習シリーズ第10集）．48pp．斜里町立知床博物館，斜里．
日本捕鯨協会．1954．1941年以降沿岸捕鯨統計（年別，月別，根拠地別，鯨種別頭数総括表）．34pp．日本捕鯨協会，東京．

西脇昌治．1965．鯨類・鯨脚類．439pp．東京大学出版会，東京．

- Nishiwaki M. & Handa C. 1958. Killer whales caught in the coastal waters off Japan for recent 10 years. Scientific report whales research institution 13: 85–96.
- Omura H., Ohsumi S., Nemoto T., Nasu K. & Kasuya T. 1969. Black right whales in the North Pacific. The Scientific Reports of the Whales Research Institute 21: 1–78.
- Omura H. & Sakiura H. 1956. Studies on the little piked whale from the coast of Japan. The Scientific Reports of the Whales Research Institute 11: 1–37.
- 大隅清治. 1981. 北太平洋の海獣類とその漁業. 水産庁東海区水産研究所放射性同位体廃棄物の海洋処分に伴う海産生物学に関する調査報告書補遺. pp. 35–57. (未見)
- 大泰司紀之. 1988. 知床の脊椎動物群集とその特徴. 大泰司紀之・中川元 (編), 知床の動物. pp. 249–263. 北海道大学図書刊行会, 札幌.
- 更科源蔵. 1955. 斜里アイヌ. 斜里町史編纂委員会 (編), 斜里町史. pp. 169–230. 斜里町, 斜里.
- 笹森琴絵・小林万里. 2006. 流水期知床周辺海域における鯨類の出現傾向を探る. 知床博物館研究報告 27: 107–111.
- 佐藤晴子. 1996. 最近, 根室海峡で観察される鯨類について. 私家版, 東京.
- 佐藤晴子. 1998. 豊かな環境に支えられたクジラやイルカの通り道. サイアス 49: 78–81.
- 佐藤晴子. 2004. レストラン知床・根室海峡. 北海道百科 1: 136–137.
- 佐藤晴子・石川聖江・江崎逸郎・笹森琴絵・高橋俊男・増田泰・吉田孝哉. 2006. 1990–2005年の偶発的な目視情報に基づく, 知床・根室海峡海域におけるシャチ (*Orcinus orca*) の出現傾向と写真識別カタログ. 知床博物館研究報告, 27: 9–36.
- スレプツォーフ M. M. 1955 (崎浦治之訳1957). 極東地方の鯨類資源について (1). 鯨研通信 65: 1–5.
- 谷口哲雄. 2005. 知床の素顔. 佐古浩敏・谷口哲雄・山中正実・岡田秀明 (編著), 世界遺産知床の素顔. pp. 9–75. 朝日新聞社, 東京.
- 宇仁義和. 1998. 知床の海獣狩猟 (第20回特別展図録). 36pp. 斜里町立知床博物館, 斜里.
- 宇仁義和. 2000. 海獣狩猟と捕鯨. 斜里町立知床博物館 (編), しれとこライブラリー2知床のほ乳類I. pp. 208–225. 北海道新聞社, 札幌.
- 宇仁義和. 2001a. 北海道沿岸の近代海獣猟業の統計と関連資料. 知床博物館研究報告 22: 81–92.
- 宇仁義和. 2001b. 漂着クジラ急増中!. 博物館のひろば 78. pp. 2–4. 斜里町立知床博物館, 斜里.
- 宇仁義和. 2004a. 北海道の海獣観察プログラムの現状と課題. 知床博物館研究報告 25: 1–6.
- 宇仁義和. 2004b. 西部系群コククジラの記録集と通過海峡. 日本海セトロロジー研究会第15回大会. (ポスター発表) <http://www.h6.dion.ne.jp/~unisan/data/graywhale/cetaken15.html>
- 宇仁義和. 2005. 知床半島周辺の鯨類. 勇魚 43: 11–19.
- Uni Y., Tazawa, M. & Masuda Y. 2005a. Mass Stranding of Killer Whale in Pack Ice at Aidomari, Rause, Hokkaido (Preliminary report). in: The Science Council of Japan and the Mammalogical Society of Japan (ed.), Abstracts of the plenary, symposium, poster and oral papers presented at 9th International Mammalogical Congress (IMC9). pp. 393–394. (Poster Session)
- Uni Y., Aota M. & Tateyama K. 2005b. Ice-entrapment of Killer Whales in the Sea of Okhotsk. in: Society for Marine Mammalogy (ed.), The 16th biennial conference on the biology of marine mammals. pp. 287–288. (Poster Session)
- Walker W. A. 1996. Summer feeding habits of Dall's porpise, *Phocoenoides dalli*, in the southern Sea of Okhotsk. Marine mammal science 12: 167–181.
- Walker W. A., Mead J. G. & Brownell R. L. Jr. 2002. Diets of Baird's beaked whales, *Berardius bairdii*, in the southern Sea of Okhotsk and off the Pacific Coast of Hoshu, Japan. Marine mammal science 18: 902–919.
- Wilke F. 1954. Seals of northern Hokkaido. Journal of Mammalogy 35: 218–224.